

On-Air 3000 ユーザーレポート

朝日放送株式会社 様

On-Air 3000



東京支社移転と同時にラジオスタジオを On-Air 3000 で更新



朝日放送株式会社
制作技術局 制作技術センター
村井 信夫

東京支社のラジオスタジオ

2005年10月31日、朝日放送東京支社が芝公園から築地市場の朝日新聞新館の10階へ移転すると同時に、ラジオスタジオを更新しました。今回は建物の広さの関係で、2つあったスタジオを1つにし、簡単なMAができる編集室、大阪と東京を結ぶ中継設備のある中継室とを隣接するレイアウトにしました。中継室では、各種録音再生機をアナログのマトリクスで接続し、簡単に素材のダビングやモニターができるよう、またマトリクスの空きを中継設備と結ぶことにより、東阪間の素材の送受ができるようになっています。サブとMA室、中継室にはそれぞれパソコン（簡易編集ソフトがインストールされています）が設置してあり、ネットワークを組んで、素材のやり取りができるようになっています。これによってスタジオ収録した番組ファイルをすぐに別の場所で編集することも可能です。今後、東京で制作した番組は、BWF-Jフォーマットのファイル形式で大阪へ納品します。

機種を選定

できるだけコンパクトな音声卓をというコンセプトの元、入力素材36chに対して、フェーダー

数16本程度の音声卓を導入することにしました。この条件を満たすには、マトリクスを付属させたアナログ卓か、フリーアサイン可能なデジタル卓という選択肢になり、トータルの価格、今後の拡張性、操作性、デザインなどいろいろな角度から検討した結果、On-Air 3000に決まりました。ここは録音中心のスタジオですが、年に数回生放送もするというので、On-Airシリーズの音声卓で培われてきたSTUDER製品の信頼性の高さも選定の理由の一つです。スタジオが1つになって、いろんな形態の番組収録が求められる中、スナップショットによるフェーダーの並び替え、バスアサインの組み換えで、完パケ録音の番組からSEだけを抜くコメントオンリーの録音まで、一瞬にしてアサインでき、面倒なパッチング作業が不要になり、作業効率も上がるものと思われます。デジタル卓にありがちなメインスクリーンでの機能変更だけではなく、フェーダーアサインモジュールを使用してのEQやCOMP、AUXなどの変更が素早くできる点がとても便利です。また今回、再生機もDAW（Trigger）を導入して、1台で4出力が可能となり、番組作りも効率化することでしょう。

振り返って

今回のシステムは、通常東京のスタッフが使用するものであり、モニターの方法一つにしても

大阪とは違うため、システムの打ち合わせ等が非常に難しかったです。また、移転ぎりぎりまで収録があったため、MDやDATなどが移設できず、最終調整は運用開始前日の10月30日になってしまいました。オペレーション・トレーニングに十分な時間が取れないまま、翌31日の収録になりましたが、大きなミスもなく無事終えることができホッとしました。

新しいAV機器を購入したての頃、使い方がわからずまごまごしますが、使い慣れていくうちに、その製品の便利さを痛感し後戻りができなくなるのと同じように、このシステムを一日でも早く、使いこなせるようになって欲しいものです。最後に、スタジオの建物工事をしていただきました日東紡音響エンジニアリング様、システム設計、工事をしていただいたSTUDER JAPAN、スタジオイクイップメント様に感謝いたします。

